

復活節第3主日礼拝説教「焼き魚を召し上がれ」

日本基督教団石神井教会 2019年5月5日

【招詞】詩編 4編2節、7~9節

2 呼び求めるわたしに答えてください

わたしの正しさを認めてくださる神よ。

苦難から解き放ってください

憐れんで、祈りを聞いてください。

7 恵みを示す者があろうかと、多くの人は問います。

8 主よ、わたしたちに御顔の光を向けてください。

人々は麦とぶどうを豊かに取り入れて喜びます。

それにもまさる喜びをわたしの心にお与えください。

9 平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。

主よ、あなただけが、確かにわたしをここに住まわせてくださるのです。

【旧約聖書日課】イザヤ書 51章1~6節

1 わたしに聞け、正しさを求める人、主を尋ね求める人よ。

あなたたちが切り出されてきた元の岩、掘り出された岩穴に目を注げ。

2 あなたたちの父アブラハム、あなたたちを産んだ母サラに目を注げ。

わたしはひとりであった彼を呼び、彼を祝福して子孫を増やした。

3 主はシオンを慰め、そのすべての廢虚を慰め、

荒れ野をエデンの園とし、荒れ地を主の園とされる。

そこには喜びと楽しみ、感謝の歌声が響く。

4 わたしの民よ、心してわたしに聞け。わたしの国よ、わたしに耳を向けよ。

教えはわたしのもとから出る。

わたしは瞬く間に、わたしの裁きをすべての人の光として輝かす。

5 わたしの正義は近く、わたしの救いは現れ、わたしの腕は諸国の民を裁く。

島々はわたしに望みを置き、わたしの腕を待ち望む。

6 天に向かって目を上げ、下に広がる地を見渡せ。

天が煙のように消え、地が衣のように朽ち、

地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても

わたしの救いはとこしえに続き、わたしの恵みの業が絶えることはない。

【福音書日課】ルカによる福音書 24章36~43節

³⁶こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。³⁷彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。

³⁸そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。³⁹わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には

肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおおり、わたしにはそれがある。」⁴⁰こう言って、

イエスは手と足をお見せになった。⁴¹彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。⁴²そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、⁴³イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

「あなたがたに平和があるように」

長い連休も残りわずかですが、いつもと何も変わらない一週間を過ごして来られた方も多いと思いますが、この機会に普段会えない家族と共に過ごされたり、特別な予定を組んでこられた方もおありだったかもしれません。自分は何も変わらなくても、世の中の動きが違うというだけで気疲れしてしまう、という方もあったのではないのでしょうか。

そのような中であっても、わたしたちは、いつものように七日の旅路を経て再び主の日の教会へと集められてまいりました。それぞれに違う思いを持って一週を過ごしてきたわたしたちです。今日、教会へ向かう道で心に携えてきたものも、それぞれに異なるでしょう。喜び勇んで、弾む足取りでおいでの方もあるでしょうし、心沈み、足を引きずるようにしてようやくたどり着いたという方もあるかもしれません。けれども、そのどなたにも、わたしはここで、主イエスと共に、主イエスに代わって、まず申し上げなければいけないでしょう。「あなたがたに平和があるように」と。

わたしたちは、「平和があるように」とお告げくださる方とお会いしようとして、ここに集まっています。他の誰でもない、主イエスが「平和」を告げくださる、「神の平和」を宣言してくださる。そのような場に、わたしたちは、集められてきました。

今日の招詞（詩編4編）で、いにしへの信仰者は、こう祈っています。

平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。

主よ、あなただけが、確かにわたしをここに住まわせてくださるのです。

主が「平和」をお与えくださるところで、身を横たえ、眠ることができる。そこに自分の住まうべき場所を得ることができる。そう言われているところを、主イエスは、弟子たちの集まる場所にお造りくださいました。弟子たちの教会にご復活の主イエスが現れてくださったとき、「あなたがたに平和があるように」とお告げくださった主イエスは、弟子たちが身を横たえることのできる場所、わたしたちが安心して眠ることのできる場を、そこに実現してくださったのです。

礼拝においでの皆さんのお姿を拝見していて、わたしはいつも身の引き締められる思いを与えられます。長い信仰生活を送られてきた方の、礼拝に対する真摯な姿勢、背筋をまっすぐに伸ばして神に向かって顔を上げられるお姿は、信仰者として生きるということ、無言のうちに語ってくださっているのです。

けれども、わたしは敢えて申し上げます、礼拝中、その身を背もたれに任せて、しばしの居眠りをしてくださってもかまわない、と。礼拝を緊張し通して終えられるのではなくて、ここで、リラックスして心のガードを外して、この場に身をゆだねてくださるときがあってもよいのです。いいえ、そのようなことを味わっていただくためにこそ、皆さんは、ここに招かれて来られたのです。

「あなたがたに平和があるように」。この言葉が告げられるたびに、皆さんの心の恐れ、疑いが取り除かれ、おののきもせず、うろたえることもなく、ただ、ここに安心して身を置く者とされることを、主は望んでくださっているのです。

「わたしの手や足を見なさい」

今日の福音書日課（ルカ 24 章）が物語っているのは、いまだイースターの日の出来事です。

その日の朝、主イエスのご遺体が葬られているはずの墓を参った婦人の弟子たちは、墓の入り口の石が取り除けられ、中が空であることを発見しました。そこには、ただ輝く衣を着た二人の天使らしき者がいて、「主イエスは復活されたので、ここにはいません」と告げられたのです。婦人たちは、他の弟子たちにそのことを伝えましたが、男の弟子たちは彼女たちの言うことを信じませんでした。ところが、エルサレムから去りエマオへと向かっていた二人の弟子のところ、見知らぬ旅人が近づいてきて聖書のこと、主イエスのことを語り始めるということがありました。二人は、エマオの村でその旅人と共に宿を取って食事の席に着きましたが、そのとき、その旅人が「主イエスだと分かった」のです。その姿は見えませんでした。二人には、自分たちと共に歩いて聖書を説き、主イエスのことを語ってくれた見知らぬ旅人こそ、主イエスの方だったのだと「分かった」のです。それで、二人は大急ぎで他の弟子たちのいるところに戻りました。すると、他の弟子たちの中にも、同じような経験をした者たちがいることがわかったのです。そのことを互いに証し合っているとき、彼らの真ん中に主イエスが立ちになられたのです。「**あなたがたに平和があるように**」と告げられたのです。

「エマオ」の出来事も不思議なことでしたが、今日の場面も、不思議なところ。主イエスがご復活なさって、弟子たちに現れたというのです。けれども、わたしが不思議に思うのは、「死んだ方が復活なさった」ということではありません。ご復活なさった主イエスがそのお姿を表して弟子たちの真ん中に立ってお語りになっているのに、どうして彼らは恐れおののいたり、亡霊を見ていると思ったりしたのだろうか、ということです。彼らは、うろたえて、心に疑いを持ちました。主イエスがご自身の手や足をお見せになり、触ってみるようと差し出されても、まだどこか信じられず、不思議がっていました。「エマオ」のときのように主イエスのお姿が見えなくなったというのではないのですから、彼らはもっと素直に信じるのができたのではないのでしょうか。

実のところ、彼らは、本当に主イエスのことを「**亡霊を見ている**」ように見ていたのではないのでしょうか。「亡霊」と訳されていますが、「霊」のことです。彼らは、「主イエスの霊を見ている」と認識したのではないのでしょうか。しかし、「**霊には肉も骨もない**」ので、彼らは、それをすぐに確信できず、恐れたり、うろたえたり、疑ったりしたのです。

では、主イエスが、「**わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい**」と言われてお見せになられたのは、何だったのでしょうか。主イエスの手や足そのものであったら、主イエスはわざわざ「**まさしくわたしだ**」などと断言する必要があったのでしょうか。主イエスが「見なさい」とおっしゃられたとき、弟子たちの目の前には、お互いの姿の他には誰もいなかったのではないのでしょうか。

《魚》をどうぞ！

そこには、弟子たちの他には誰もいなかったのです。主イエスのことを語り合う仲間たちの他には、誰もいなかったのです。

けれども、彼らは、語り合っていました。主イエスのことが「分かった」という体験を。聖書を説いてくれた見知らぬ人のことを。主イエスのことを語ってくれた旅人のことを。そこに主イエスは現れたのです。彼らの真ん中に立たれたのです。そして、言われたのです、「**見なさい**」と。

「見なさい、これがわたしの手だ。これがわたしの足だ。肉も骨もない霊ではなく、この手を見なさい。この足を見なさい。これこそ、わたしだ。わたしはここにいます。」そう、主イエスがお告げくださったのを聞いた弟子たちが見ていたものは、お互いの手、お互いの足、だったのではないのでしょうか。

ご復活の主イエスは、見えないのです。わたしたちのほとんどだれも、ご復活の主のお姿をはっきりと見た者はいないでしょう。けれども、弟子たちの集まる場所、聖書が説かれ、主イエスのことが語られるところ、その者たちの中に、主イエスは確かにおいでくださっているのです。それは、霊のお姿の主イエスかもしれません。けれども、「ご復活の主イエスの霊」は、捉えどころのないものではないのです。そのあたりの空中を浮遊している「霊」ではありません。「手」があり、「足」があり、「肉」があり、「骨」がある者、今生きている者の中に、まさにそのただ中においでくださり、宿ってくださり、一つとなってくくださる「霊」なのです。

畏れ多いことです。主イエスは、弟子たちの手を「わたしの手」と言われるのです。わたしたちの「足」を「わたしの足」とおっしゃられるのです。「あなたが見ている互いの手、足、それがわたしの手、足だ」とお告げくださるのです。そのようなことを告げられて、恐れおののかないでいられるのでしょうか。うろたえずに、疑わずにいられるのでしょうか。皆さんの隣の人の手、その足が、主イエスの手であり、足であると、即座に信じられるのでしょうか。

けれども、主イエスは、そうお告げくださった。ご復活の主イエスが、そうお告げくださった。そうであれば、わたしたちは、互いの手を、主イエスの手として見ることができる。互いの足を、主イエスの足として見るすることができる。自分の手や足をそのように見ることができなくても、互いのものをそのように見ることはできる。いいえ、そのように信じられなくても、そう見るのです。そこに、主イエスがいらっしゃるからです。主の霊がおいでだからです。

「ここに何か**食べ物があるか**」と主は言われました。主は弟子たちから魚をお受け取りになり、召し上げられました。かつて、主イエスの手からパンを受け、魚を与えられ、杯を取った弟子たちが、今は、主に魚をお渡しするのです。その魚をお受けになる主の手は、わたしたちの間にあります。互いの手に、魚（イクテュス。キリスト者のシンボル）を一切れ差し出すのです。主がそうしてくださったことを、今は、わたしたちが互いに行うのです。そこに主がいらっしゃるからです。そこで主は、「**平和があるように**」と祝福してくくださるでしょう。